

## 令和元年 第10回教育委員会会議

### 1 日 時

令和元年9月11日（水）

開会 15時00分

閉会 15時45分

### 2 場 所

教育委員会室

### 3 出席者

田中新太郎教育長、金田清委員、横山真紀委員、眞鍋知子委員、西川恒明委員  
新家久司委員

### 4 説明のため出席した職員

新屋長二郎教育参事、臼井晴基教育次長、堀田葉子教育次長、杉中達夫教育次長  
塩田憲司教育次長兼学校指導課長、岡崎裕介庶務課長、中村義治教職員課長、  
清水茂生涯学習課長、田村彰英文化財課長、村戸徹保健体育課長

### 5 議案件名及び採決の結果

議案第28号 令和2年度石川県立学校第1学年入学者の募集定員について  
(原案可決)

議案第29号 募集定員に関する規則の一部改正について（原案可決）

### 6 報告案件

いしかわ産業教育フェア2019の概要について

### 7 審議の概要

#### ・開会宣告

田中教育長が開会を告げる。

#### ・質疑要旨

以下のとおり。

報告事項 いしかわ産業教育フェア2019の概要について  
(塩田教育次長兼学校指導課長説明)

それでは、お手元資料15ページをご覧ください。いしかわ産業教育フェア2019についてご説明いたします。

このいしかわ産業教育フェアにつきましては、平成28年度に開催された「全国産業教育フェア石川大会」の成果を一過性のものに終わらせることなく、本県の産業教育のさらなる拡充を図るため、質・量ともに内容の充実を図りながら開催しているものであり、昨年度も多くの方にお越しいただき盛況に終えることができました。今年度は、昨年度のアンケート結果等も踏まえて、さらに改善を加え実施したいと考えております。以下、資料を基に説明させていただきます。

開催日時は、10月20日(日)9~16時、会場は、県産業展示館2号館でございます。資料ページ中ほどの「7 フェアの概要」をご覧ください。今年度は、開会式の前の8時50分からオープニングセレモニーとして、県立小松工業高校の吹奏楽マーチング部が、きれいな動きとともに力強い演奏を披露したいと考えております。企画につきましては、四つのエリアで発表、展示等を行うこととしており、詳細は、次の16ページ以降の資料でご説明したいと思います。また、資料下段には前年度からの改善点として、3点記載してあります。詳細につきましては、後ほどエリアごとに説明させていただきます。

それでは、資料16ページをご覧ください。上段に、産業展示館2号館の各エリアの配置をお示ししました。真ん中上部の青色で囲まれたステージ・発表エリアでは、開会式や各種発表等を行います。左下のL字型の緑色で囲まれた体験エリアにつきましては、L字の縦部分にあたる多目的ホールでは小学生が職業体験を行うキッズビジネスタウンを設け、また、L字の横部分の展示館出入口ホール付近には各種専門部会の体験ブースを設けております。右上や右下屋外の赤色で囲まれたところには、販売エリアを設け、会場の中央部の紫色で囲まれたところに展示エリアを設けました。右端の黄色で囲まれたところには、昨年度より来場者向けの休憩スペースを設けております。

ではまず、資料16ページ中ほどから記載してあります、ステージ・発表エリアの企画内容についてですが、専門部会の研究成果発表については、各専門部において特徴的な取り組みを行っている学校の内容を中心に発表を行うこととしております。例えば、商業部会では、「地域企業と連携した商品開発」として、金沢商業高校が発表いたします。また、資料16ページの下に記載してあります、「専門高校等における産学連携人材育成事業」については、「企業や大学等と連携・協力し、地域の創生に貢献できる人材の育成を目指す」ことを目的としてスタートさせた、今年度3年目の事業にあたるものです。今年度、指定を受けている10校が、これまでの活動の中間発表を行うこととしております。内容につきましては、17ページをご覧ください。

例えば、表の下から三つ目にあります、七尾東雲高校は、「農業環境制御システムの製作」というテーマで、太陽エネルギーを利用した灌水制御システムを構築することで、学校の農産物における灌水作業を軽減化することを目的とした取り組みや、表の下にあります能登高校は、「のとキリシマツツジの生産・普及・保護活動と担い手育成」というテーマで、「のとキリシマツツジ」に関するさまざまな活動を通じて、専門技術を習得するとともに地域に必要な担い手の育成を目指す取り組みについて発表をいたしま

す。

併せて、この発表内容につきましては、展示エリアの産学連携ブースで、企画内容や連携先の企業・大学等について、各学校の生徒がそれぞれのブースで、直接来場者に説明することとしております。

また、専門部会ブースでは、ステージ発表の内容を含め、各専門分野における普段の学習内容を紹介するパネルや作品を展示いたします。

資料 18 ページをご覧ください。体験エリアにつきましては、専門部会による体験ブースでは、昨年度から、スペースをさらに拡充し、より多くの方々が体験できるようにいたしました。今年度は、体験エリア内のブースの数を 6 から 7 へと増加したことに伴い、会場内の見通しを良くするため、また、体験エリア内のアクセスを良くするため、体験エリアの中央に通路を作る形に配置を工夫しました。体験内容としましては、工業部会の携帯ストラップ制作や特別支援教育部会のマッサージ体験、昨年度とは違った体験メニューも用意しております。またキッズビジネスタウンでは、今年度も、小学生に、看護師のお仕事体験やコンピュータを使った写真入りカレンダー作成などを体験してもらい、仕事の楽しさや働くことの大切さを伝えたいと考えております。

次に、中ほどの販売エリアについてですが、このエリアにつきましても、昨年度より屋内の販売スペース、具体的には特別支援教育部会のスペースを広げるとともに、昨年度好評であった屋外スペースを設け、より多くの商品を販売していくこととしており、生徒が育てたトマトやねぎ等の農産物や、生徒が考案した入浴剤、クッキーなどの商品を、実習も兼ねて生徒が販売いたします。またキッズビジネス体験として、小学生に各販売スペースに入ってもらい、高校生とともに、お菓子や野菜等の販売も行いたいと思っております。

その下のコンテストについてですが、2 階の会議室において、全国産業教育フェアからスタートしたプログラミングコンテストを実施します。専門高校 9 校 12 チームの生徒がプログラミング技術の正確さとスピードを競うこととしております。今年度は、コンテストの様子をステージ上のスクリーン等に上映したいと考えております。その他、小・中学生が楽しめるように、小・中学生向けのスタンプラリー形式の企画も実施したいと考えております。

フェア当日は、ただ今ご紹介しました企画を含め、多数の催しを計画しておりまして、主役となる高校生はもちろんですが、子どもから大人まで幅広い方々に楽しんでいただける充実したフェアにしたいと考えております。委員の皆さまにおかれましては、お忙しいとは存じますが、ぜひご来場いただき、高校生の活動の成果をご覧ください幸いです。以上で報告を終わります。

#### 【質疑】

(眞鍋委員)

毎年開催されていて年々充実されてきているかと思うのですが、昨年度も小中学生にどうやって声を掛けるのかという質問をしたのですが、昨年度の実績で小学生・中学生はどの程度参加があったのか分かれば教えてください。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

特にキッズビジネスタウンの声掛けをやっておりまして、各小中学校に 20～30 部の

チラシを分けています。キッズビジネスタウンに申し込みのあった人数を申しますと、昨年度は79名の申し込みがありまして、結果的に70名の生徒が参加しています。その前の年は161名の申込者があり、人数に制限があるものですから、おととしは実際に64名が参加しているという状況でした。

(田中教育長)

しっかりと準備をして、いいフェアになるように頑張りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

議案第28号 令和2年度石川県立学校第1学年入学者の募集定員について  
(塩田教育次長兼学校指導課長説明)

それでは、資料1ページの議案第28号、お手元の資料によりご説明いたします。

1の提案理由につきましては、令和2年度における石川県立学校第1学年入学者の募集定員を定める必要があるためでございます。2の根拠法令については、記載のとおりです。3の内容につきましては、2～3ページに示してございます。では、まず最初に2ページのA3横書きになっておりますので、横に開く形でご覧いただければと思います。

はじめに、1の「全日制高等学校」についてです。まず参考としまして、右ページ中ほどをご覧ください。今年度の募集定員および学級数の増減については、(1)の太枠の左列にありますように、平成31年3月の中学校卒業者数について、県南・県央・県北の3地区とも、大きな変動がなかったことから、いずれも募集定員を変更いたしませんでしたが、太枠にありますように、来年度については、令和2年3月の中学校卒業予定者数が、県全体で500人以上減少することから、3地区とも募集定員を減らすことといたします。

それでは、資料の左側をご覧ください。順に説明をさせていただきます。(1)の「募集定員策定の基本的な考え方」については、記載のとおりです。来年度の具体的な募集定員および学級数の増減については、(2)と(3)に記載しており、まとめて説明したいと思います。

募集定員を策定する際の基礎となる中学校卒業者数については、(2)にありますとおり、県南地区は134人減の2145人、県央地区は269人減の6609人、県北地区は122人減の1410人となり、県全体では525人減の1万164人となります。(3)をご覧ください。今ほどの地区別の中学校卒業者数および公私比率等を総合的に勘案し、県南地区については2学級を減ずることとし、小松市立と寺井の2校をそれぞれ1学級減、県央地区については4学級を減ずることとし、松任、金沢伏見、金沢西、津幡の4校をそれぞれ1学級減、県北地区については3学級を減ずることとし、羽咋、七尾、輪島の3校をそれぞれ1学級減にしたいと考えております。この結果として、県全体では、(2)の表の下段にありますとおり、来年度の募集定員を、今年度の7840人から360人減の7480人に、学級数は募集定員を40で除算した形になりますが、今年度の196学級から9学級減の187学級となります。

それでは、地区別の状況について、もう少し詳しく説明いたします。まず県南地区についてです。この地区では、中学校卒業者が134人減少する見込みであり、資料には記載してございませんが、その内訳を見ると、小松市で約100人、能美市で約40人減少することから、私立学校等への入学者も考慮して2学級減とし、先ほどありましたように、小松市立、寺井の2校をそれぞれ1学級減としたものです。寺井高校については、ここ3年間定員割れの状況にあり、直近の平成31年度については、54人定員割れの状況であったことから、1学級減とし、また、小松市立高校については、設置者である小松市教委が決定することであり、平成4年度以降、募集定員を変更しておりませんが、今回、小松市教委と協議・検討し1学級減としたところです。

次に県央地区です。この地区においては、中学校卒業者が269人減少する見込みで、私立学校等への入学者や県央以外からの入学者がいることも考慮して4学級減とし、松任、金沢伏見、金沢西、津幡の4校をそれぞれ1学級減といたします。具体的には、普

通科と総合学科を併設する松任高校については、白山市の中学校卒業者が約 40 人減少する見込みであること、また、学校全体で 5 年連続して定員割れの状態であり、直近の平成 31 年度は 41 人、平成 30 年度は 59 人の定員割れであったことに加えて、来年度から大学等進学者への対応を、普通科に一本化することから、総合学科を 1 学級減とします。津幡高校については、津幡町の中学校卒業者が約 60 人減少する見込みであること、また、総合学科が近年大きく定員割れの状況であり、平成 31 年度は 26 人、平成 30 年度は 41 人定員割れであったことから、1 学級減とします。さらに、金沢市内において中学校卒業者が約 160 人減少することから、学校の規模、特別教室の使用状況、県央地区内での校種のバランスなどを考慮し、金沢伏見高校、金沢西高校をそれぞれ 1 学級減といたします。

次に、県北地区についてです。この地区においては、中学校卒業者は 122 人減であります。定員割れの学校が多数あることを踏まえ 3 学級減とし、羽咋、七尾、輪島の 3 校をそれぞれ 1 学級減といたします。具体的には、輪島高校については、直近の平成 31 年度が 34 人の定員割れの状態にあり、また、輪島市の中学校卒業者が 15 人減少することから、1 学級減とすることにいたしました。なお、後ほど改めてご説明いたしますが、今回、総合学科を廃止し、普通科の中にコースを設けることとしております。また、中能登地区においては、中学校卒業者が羽咋郡市、七尾鹿島地区それぞれで約 40 人、合わせて約 80 人の減であり、今後も生徒数が減少する見込みであることに加え、この地区においては、羽咋と七尾高校以外は、4 学級以下と小規模化していることから、5 学級の羽咋高校と 6 学級の七尾高校をそれぞれ 1 学級減といたします。

以上が、各地区ごとの募集定員および学級数の増減の内容とその理由です。

その下の (4) その他について、ご説明したいと思います。ここに記載の七尾東雲、志賀、飯田については、学校全体での募集定員は変更いたしません。学校内において募集定員の割振りを変更するものでございます。七尾東雲高校の演劇科および総合学科の募集定員については、現在、演劇科が 1 学級 40 人、総合学科が 1 学級 40 人となっているものを、演劇科を 1 学級 20 人、総合学科を 2 学級 60 人に変更いたします。理由といたしましては、演劇科については、全国募集も実施しておりますが、ここ 5 年の入学者数は十数人で推移している一方で、総合学科については、2 年前に募集定員を 2 学級から 1 学級にした際には 40 人を超える志願者が集まったこと、また、学校長からは、農業、工業の特色を生かして学習効果を高めるためには生徒数が一定数必要であり、演劇科の募集定員の 20 人分を総合学科に振り替えてほしいとの要望があったことから、今回変更するものです。

次に、志賀高校、飯田高校については、総合学科等における学科・系列の一部改編の中で、総合学科を普通科のコースへ改編することに伴うものであります。また、参考として、輪島高校も同様に、総合学科を普通科のコースへ改編することから、それに伴う変更についても記載しております。

以上が、全日制高等学校の募集定員に関する内容になります。

次に、次に、右ページにありますとおり、2 の「定時制高等学校」、3 の「通信制高等学校」につきましては、それぞれ平成 31 年度入試と同数の募集定員といたします。4 の「特別支援学校」につきましては、入学希望者の実態を十分勘案し、入学希望者全員を受け入れることができるように 316+（専攻科）若干名の募集定員といたします。5 の「県立金沢錦丘中学校」につきましては、平成 31 年度入試と同数の募集定員といたし

ます。

3 ページの資料には、学科の一部改編に伴う募集定員の変更も含めて、学校別の募集学級数と募集定員をまとめてあります。前年度と変更がある箇所を太枠で囲んで示してありますので、ご覧いただければと思います。

以上、ご審議をよろしく申し上げます。

#### 【質疑】

(金田委員)

対象校ではないのですが、大聖寺が4クラスになっていますね。大聖寺の現状はどういうものですか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

傾向といいますと、確かに加賀地区の生徒が小松へ若干流れている傾向がありますが、大聖寺は特進クラスを3年前に作りましたので、特進クラスの人気といいますか、中学生が特進クラスに入って、そこで勉強しようという流れもできていますし、特進クラスの中から大学へ進学している生徒も出始めていますので、そこが一つの特色になって、今後地元の生徒が高校に定着していけばいいなと思っております。

(金田委員)

市教委の協力というか、大聖寺はおらが村の学校という意識は、かなり強いですか。こういう4クラスになった時点で、市教委は危機感を持たれましたか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

加賀市は、ご承知のとおり、大聖寺高校と加賀高校と大聖寺実業高校の三つありますので、それぞれ職業系の学校と普通高校をどのようなバランスでやっていくか。加賀市自体も、あの地区を盛り上げるための会を作ったりして、地域一体となって学校を盛り上げていこうという機運が高まっているという状況はつかんでおります。

(金田委員)

というのは、大聖寺を先例として、今回、羽咋、七尾、輪島ですか、子どもの自然減が多いというのが一番の大きな要因だと思うのですが、問題は、そういう現状の中にあって、市・町教委を含めて危機意識があるかどうかということ。そして、今言われた、大聖寺のような特進クラスとか、あるいは特色あるような学校運営を、生徒が減りながらもやっているかどうか。あるいは展望を持っているかどうか。それはどういうものですか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

羽咋高校については、例えば医療系を狙う生徒、それから教員を目指す生徒をより羽咋高校から出そうということで、今の前の校長が医志・教志未来塾というものを学校の中に作りまして、講演を聞いたりとか、そういうところへ見に行ったりということで、生徒のより明確な志望を高めるという取り組みをやって、それが結果的に勉学の方につながっていけばいいなということで、そんな取り組みを数年前から熱心に行っています。

それから七尾高校の方は、生徒の減に伴って、さまざまな学力層への対応ということで、学校はいろいろな習熟度や、補習など体制を組みながら苦勞してやっているということは聞いています。学校としては、かなり努力していると思います。実際あそこはNSHとSSHの取り組みを、文系・理系それぞれでやっていますので、プランを見ますと、かなり重厚な形で今現在取り組んでいますので、それは特色として、今も傾向としては続いていると考えています。羽咋高校も頑張っております。

輪島高校の方は、多少、普通科と総合学科で特色が分かりますが、普通科の方は、元々あの地区の進学志望の高い生徒があそこに残って、かつてから大学への実績も上げております。それから総合学科の方は、あそこは朝市がありますので、総合学科の課題研究などの取り組みを朝市が連携する形で、毎週、朝市に総合学科の生徒が出て行って、自分の学校で開発した商品をそこで売ったり、あるいは学校の中にホームページを作って、そこで朝市の商品を紹介して、買えるようなサイトを作ったり、かなり地元の商業的な部分と連携する形で取り組みを充実させてやっています。地元密着型でやっています。

(金田委員)

学級減になる3校は、それぞれの学校では特色ある運営の仕方をやっているとお聞きしました。私は、これから特に学級減になっていく時代になると思うのだけれど、そこでその流れに乗るのではなく、今言われた、それぞれの学校で特色あるものを作っていないか、日本の国そのものがそうなのだけれど、人口が減少、縮小していても、今言われるような、各学校がそういう特色あるものを打ち出していけば、羽咋も七尾も、輪島も、大聖寺もそうだけれど、未来は縮小しないと思います。だから、特に縮小した学校、あるいは、これから学級減に向かう学校は、学校長をはじめとして、学校運営において特色あるものを打ち出していかないと、減少していく時代に対応できなくなっていくのではないかと思います。なので、ぜひそういう形で、教職員課も学校指導課もやっていただければと思います。

(田中教育長)

私からも発言させてもらいます。学校は、みんな危機感を持っていろいろやっているのですが、輪島とか奥能登などの人口自体が減って、子どもの数が減るところは止めようがありません。学校が何か努力しても子どもの数自体が減るので。ただ、大聖寺や羽咋もその一つだと思うのですが、大聖寺ですと小松に出ていくという話がありまして、地元の学校よりも小松のまちの中の学校へ行きたい。あるいは羽咋なら金沢へ通いたい。これを県立学校で止めるというのはなかなか難しい。そうすると、今、委員がおっしゃったように、中学校の進路指導が地元のために地元に残るということをしつかり進路指導してもらわないと、県立学校だけではなかなか食い止められないのが現状だと思います。加賀市も、それで非常に苦しんでいまして、加賀市の教育委員会なり加賀市なり産業界の皆さんが何かできることがないかということで、今検討を始めているような状況です。そういう意味で、要は、大人の流れと子どもの人の流れが大体マッチしてしまいきますので、その辺は、市・町の教育委員会の危機意識、今、金田委員がおっしゃった、市・町の行政もしつかり、地方創生や地域創生をやっているのなら、高校生の進路指導みたいなものも一緒になって頑張ってもらわないと、にぎやかなところに通いたいと、ほうっておいたらそうなるので、そこが今、市・町と県教委が過去からいろいろと



協議しているのですが、なかなか解決策が出てこない。ということで、双方、県立学校も特色づくり、市・町の方も地元の地域活性化ということで、進路指導も含めて一緒になって問題意識を持ってやっていただく必要があるかなと思います。

(眞鍋委員)

つい最近、大聖寺高校に、今年度、探求型学習のアドバイザーのことで打ち合わせに行ってきました。特進クラスは、加賀市出身の生徒の比率が多いのだそうです。普通クラスは小松出身の生徒の比率が高いそうです。ですので、加賀市の中学校を出て、小松の方には行かずに加賀の大聖寺高校で特進クラスに入って、上を目指したいという生徒が非常に増えてきていると、校長はおっしゃっていましたし、進学実績も見せていただきましたが、良い大学にかなりの率で進学されているようでした。地元の中学校の進路指導なりが危機感を持って地元の高校を応援するという体制で、どこも頑張っていたらなと思いました。

(田中教育長)

おっしゃるとおりですね。あと、大学へ行った場合は、また U ターンをさせなければいけない。それもあるのですが、高校を済んで就職される生徒が結構多いので、そういう高校生がぜひ地元の企業にというのが一番理想なのです。ということで、大学へ行く、進学を頑張るだけでは駄目で、高校を卒業して就職する人たちに、都会へ出ずに、あるいは金沢へ出ずに、地元で就職してということになると、やはり地元の商工会議所あたりともタッグを組んで、インターンシップなどもやりながら地元の企業を知ってもらう、地元の企業に就職してもらう。そんなこともセットで、ぜひ市・町には一緒になってやってほしいなと思っています。

(新家委員)

今、大聖寺高校で特進コースがあるというのをお聞きしたのですが、すごくいいことだと思っています。それで、私は特進コースがあることを初めて知ったのですが、このところに、要は、皆さんが分かるのかと。私立だったら、例えば星稜なり遊学館なりに特進コースがあるのはよく分かっているのですが、大聖寺高校で特進コースがあって、定員が何人というのをもっと伝える手段・方法を考えられた方がいいのではないかと思います。

(田中教育長)

現状でいうと、募集のパンフレットには全部書いてあるのですね。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

そうです。

(田中教育長)

中学生、受験生の保護者には全部分かります。ただ、世の中にアピールするという意味では、学校も、もう少し、だから、先ほど言いました、地域の皆さんと一緒にいろいろな活動する中で、地域の人にも知ってもらう、企業にも知ってもらう。そんな

ことも一緒になってやっていけばいいかなと思います。

(西川委員)

確認です。令和5年までの生徒数が出ていますが、この後の傾向として、やはり減る傾向は間違いないですか。

(田中教育長)

私の方から説明します。簡単に言うと、この先10年で1000人減ります。ここに出ていませんが、6年3月、7年3月、8年3月で、3年連続してまた減ります。ただ、この4年間を見ると、減って、減って、増えて、増えてなのです。その次は、減って、減って、減ってといくので、10年後には県下全部で1000人減るということで、この表の右側の時代になったら、少し思い切った募集定員の変更みたいなことも必要になってきます。この4年間の増減は減って、増える状況なので、ちょっと調整局面だと思っています。ただ、能登の方は、そんな大きなでこぼこはあまりないのです。じわじわと減っていきます。金沢は、増える年が間に挟まったり、でも全体の傾向としては、10年で見ると、やはりマイナスになるということなので、募集定員も、今後4年間あたりを見て、どこの学校がどういう倍率になるか。あるいは、現実に在校生がどのくらいになるか、自然に選択もされていくのではないかと。能登は違いますよ。能登はほとんどが地域に学校は1校しかなくなっているのです。ただ、金沢、加賀の方では受験する保護者も生徒も、私学も含めて選択肢が出てきますので、そういう意味では、逆に言えば、生徒数を集めるということになると、県立学校自身も特色づくりをやっていかないと大変です。ただ、全体にパイが多すぎると、努力が全部報われるということにはならないので、そこはある程度の覚悟も必要かなと。ただ、この4年間様子を見て、またじっくりとその先は協議検討していかなければいけない時期が来ると思います。

(西川委員)

余談ですけど、小学校1年生の入学予定ゼロというところがいっぱい出てきているのです。

(田中教育長)

奥能登ですね。

(西川委員)

奥能登と、七尾もそうです。

(田中教育長)

七尾の小規模校ですね。

(西川委員)

はい。

(横山委員)

今の教育長のお話を伺って、10年先の1000人減という大きな流れの中で、今回の県南地区のところで、小松市立が1学級減というのは、平成4年以来ということで、そういった大きな波を見据えてのご判断があったのかという、背景の部分をお聞かせいただければと思います。

(田中教育長)

簡単に言いますと、平成に入って、子どもの数が減った中で、ずっと公立学校の生徒は減り続けています。そんな中で、実質私立学校は、最終的には在籍者数はあまり減っていないのです。逆に言えば、子どもが減った分だけ、公立学校、県立・市立学校で減った分を全部かぶってきているというのが現状です。そんな中で、小松地区では市立はずっと二十何年変わっていないということは、その間、県立学校で調整をしてきたということなので、一昨年、小松明峰高校を1学級減らしたときに、「小松市さん、長い間触っていないのだけれど、2年後に1学級を市立で協力いただけませんか」ということでお願いして、今回はご了解もいただけたので。最終的に減らす、減らさないは、小松市教委の権限で、強制できないものですから、事前にご相談、協議しながら、今回、普通科で1学級減じていただいたということです。

小中学校もどんどん統合が進んだりしています。金沢近辺と南加賀でも、大聖寺以外は、まだ学校数もたくさんあって、子どもたちも選択する余地がありますが、奥能登の場合は、地域で通える範囲に学校が一つしかないというところばかりになっていますので、再編整備という話は、ものすごく難しい話です。そういう意味で、少し知恵を出さなければいけない時期が来るとは思いますが、今ここにお示ししたように、令和5年3月には県北地域も82人増える年もあるということなので、教育委員の皆さんとも今後の状況を見極めながら、またいろいろ先を見ながら検討していくことになると思います。よろしくお願ひしたいと思ひます。

(田中教育長)

採決を行う。

(各委員)

異議なし。

議案第 29 号 募集定員に関する規則の一部改正について  
(塩田教育次長兼学校指導課長説明)

それでは、資料 4 ページをお開きください。議案第 29 号の石川県立高等学校規則及び石川県立特別支援学校規則の一部改正についてお諮りするものでございます。提案理由につきましては、(1) 令和 2 年度における第 1 学年募集定員の決定により、高等学校の募集生徒数を変更する必要があること、および (2) 令和 2 年度における第 1 学年募集定員の決定により、特別支援学校の募集幼児・生徒数を変更する必要があるためでございます。根拠法令につきましては、記載のとおりです。改正案につきましては、8 ページから 14 ページにお示ししてございますが、説明につきましては、5 ページからの新旧対照表で説明させていただきます。5 ページをお開きください。

表の右側が現行で、左側が改正案でございます。なお、太枠で囲ったところが変更箇所でございます。それでは、県立高等学校規則の変更箇所から、ご説明いたします。

設置学科の欄において太枠で囲ってある部分は、総合学科等における学科の一部改編に伴うものであり、募集生徒数の欄において太枠で囲ってある部分は、先ほどお諮りいたしました募集定員の変更に伴うものです。高等学校規則についての変更は以上です。

次に、2 枚めくっていただきまして 7 ページの「石川県立特別支援学校規則」の新旧対照表をご覧ください。特別支援学校については、義務教育である小学部・中学部を除き、先ほどお諮りいたしました募集定員に基づき、募集幼児・生徒数を変更いたします。変更となった部分を、太枠で囲んでありますので、ご覧ください。

以上が改正点でございます。よろしくご審議をお願いします。

(田中教育長)

先ほど決定いただきました募集定員の変更、それと教育委員会議等でご説明しました、総合学科等の学科の一部改編に伴う規則の改正でございます。

【質疑】

(西川委員)

特別支援学校で、例えば七尾特別支援学校が 33 人から 25 人となっておりますが、それでやっつけられるという思いですね。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

募集定員につきましては、特別支援学校の中学校 3 年生に在籍している生徒、それから普通中学校で在籍している特別支援学校の可能性のある生徒を全部調査しまして、希望する生徒は基本的に入れる募集定員を設定しております。

(田中教育長)

過去、これを越えたことはないですね。逆にこれよりだいぶ少なくなると。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

はい。多めに入れるように。

(田中教育長)

年によって、ちょっと増減がありますが、全体が減っているというわけではありません。

(西川委員)

いしかわ特別支援学校を見に行かせていただいて、児童生徒数がいっぱいというような思いがしたのですが、それは学校の先生も頑張っていて、保護者が信頼してくれて、ああいう状況になっているのだと思うのです。食堂も一回で入れきれなかったような気がしているのですが、その辺は大丈夫なのですか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

確かに、ご指摘のとおり、生徒数が増えている状況がありますので、限られたスペースを、時間を少し変えながらとか、そういう工夫をしながら、いしかわ特別支援学校についてはやりくりをしています。特段、このことができなくて困っているということではないですが、いろいろな知恵を出しながら工夫してやっております。

(田中教育長)

いしかわ特別支援学校は、非常にたくさん部屋があって、特別に裕福な使い方をしていきます。そんな中で、生徒がだいぶ増えてまいりましたが、今はやりくりができていく範囲にあると思います。ただ、今後の生徒数の見込みも、私たちもいろいろしていますが、いしかわ特別支援学校の方は近くピークになって、それ以上は増えないのではないかと見ています。今のところ、廊下も広いですし、共有スペースも多いですし、例えば七尾特別支援学校や小松特別支援学校と比べたら、ふんだんに余裕のある校舎です。それと、委員は行ってご覧になったと思いますが、400人いますが、そんなごちゃごちゃしている感じではないでしょう。

(西川委員)

食堂だけが。

(田中教育長)

そうですね。職員室と食堂だけはちょっと窮屈なところがございますが。そんな意味で、今は何とか支障なくやりくりできる範囲にあるのかなと思っています。

(田中教育長)

採決を行う。

(各委員)

異議なし。

・閉会宣言

田中教育長が閉会を告げる。